

多様性の時代と持続可能な社会を見据えた

野外教育のあり方を考える

三ヶ田 智弘¹⁾ 市川 雪絵²⁾ 藤浦 清香³⁾ 井倉 洋二⁴⁾

コメンテーター 三ヶ田 智弘 氏

シンポジスト 市川 雪絵 氏

シンポジスト 藤浦 清香 氏

コーディネーター 井倉 洋二 氏

(以下、敬称略)

話題提供 1

(市川) 皆さんこんにちは。今日は鹿児島県の森の中で、日々小さな子どもたちが色々な自然体験をしている、そんな様子を皆さんにお伝えしながら、一緒に学ばせていただこうと思います。よろしくお願ひいたします。軽く自己紹介をさせていただきます。私は実は横浜出身で、全く自然のない環境で 18 歳まで育ちました。下町育ちです。近くに中華街や山下公園もあり、いわゆる観光スポットばかりで、海といえばカッコいい外国客船は来ますが、足が入れられるような砂浜は全くないという、大都会のど真ん中でした。ご縁があって鹿児島大学の方に入学しまして、教育学部の方で学ぶのですが、学生時代に鹿児島 YMCA の創設の準備に携わらせていただく機会がありまして、野外教育の企画とか運営に関わることになりました。卒業後は一旦実家の横浜へ戻り、東京ガスの企業館であった「環境エネルギー館」という、環境学習施設の立ち上げで 3 年程。その後、鹿児島へ I ターンし鹿児島県の環境学施設の「生命(いの

ち)と環境の学習館」、鹿児島市の「環境未来館」という、3 つとも環境学習を推進するために作られた普及の施設だったんですけども、いずれもソフトプログラムの開発ですとか、運営に携わることになります。その最中に、今日話題提供させていただく「かごしま森のようちえん」を始動するという中で、NPO 法人も立ち上げることになりました。そもそも「かごしま森のようちえん」を作ろうと思ったきっかけなんですけれども、当時、学習施設に、いろんな子どもたち来ていたんですが、色々知識は持っていてよく勉強しているんですね。カエルの生態なんかもよく知っているんですけども、実際目の前に出すと全く触れないという状況で。経験不足、イメージ先行ということが、非常に顕著でした。地球温暖化なんかについても解説していたんですけども、その要因やメカニズムも本当によく理解していました。ところが一向に、じゃあどうすればいいかっていう部分の行動に、なかなかつながっていかない。つまり、実体験が乏しいために、自分事としての認識と行動が乖離しているんですね。そこで小さい時からもっと本物の体験をさせないといけないんじゃないかということで、学習施設や机上の学習の、もう片輪を作るつもりで、近隣のフィールドを使って小さいお子さん向けの自然体験を始めたというのが始まりです。日本における森のよ

1) 医療法人三ヶ田慈愛会 Medical Empowerment Station 陣屋の里

2) かごしま森のようちえん

3) 森の学校 楠学園

4) 鹿児島大学

うちえんは、20年ほど前から日本でもかなり活動が盛んになってきました。定義としては、自然体験を基軸にした子育て保育の総称です。

「森のようちえん」という表記の方法ですが、「森」とはあらゆる自然フィールドを指しています。森に限らず、川とか海とか場合によっては里山、都市部であれば公園といったところを使って活動するような団体もあります。「ようちえん」というひらがな表記については、文科省が認可している既存の幼稚園とか、厚生省が管轄している保育園とは一線を画すということで、漢字表記ができないことになっています。法人化などある必要もなく、自主保育ですとか、お母さんたちのサークル活動のスタイルの団体もかなり誕生しています。「ようちえん」というぐらいなので、一般的には対象0歳から7歳ぐらいですが、「かごしま森ようちえん」は、実は卒園児も受け入れるような小学生クラスもありまして、現在1番目の子は20歳前後の子どもたちも関わっています。先に申し上げたように、NPO法人という主体はむしろ少なく、既存の幼稚園や保育園が月に何回、自然活動を実践するとか、社会教育団体などでもイベント的に主催されることがあります。地域によって、また主体によって、教育カリキュラムや回数といったものは非常に多岐にわたるんですけども、その中で共通点というのが「子どもの主体性を大事にする」ということと、「子どもがど真ん中」という考え方を大事にしている点があげられると思います。

さて、私たちの拠点ですが、鹿児島県の地図を見ていただくと、薩摩半島上のほぼ真ん中に位置するのが森のようちえんがあるところですが、県全体のほぼ中央に桜島がありまして、鹿児島湾（錦江湾）の中に桜島が陣取ってる感じです。そして桜島から約4km海を隔てたところが鹿児島市街地で広がっているんですが、その市街地の中に位置していることがお分かりいただけると思います。中心市街地から車で10分ぐらいのところですが、一気に高台に

上がります。台地は錦江湾を作った大火口のカルデラで、シラス台地なんですね。私たちの活動するフィールドもその台地の上になります。いずれにせよ、市街地中心から10分の住宅地です。フィールド周辺を拡大してみると、中心部を走る県道がありまして、これ片道2車線、全部で4車線ぐらいのかなり大きな道路です。このメインの道路から1本入った住宅街の抜け道がありまして、この通り沿いに事務所があります。この道は狭い上に車の往来が激しいので、かなり緊張感を持って歩かないといけないほどです。この道に沿って、東側に細い川が流れていまして、川に向かって急傾斜の谷になっています。ここが実は私たちのフィールドになっています。この周辺を宅地化する40年ほど前、現フィールド一帯は、急傾斜地ということで造成を免れた山林で、今まで生き残ってきました。というわけで、事務所の前の、交通量の多い道をわたり、そこから一歩分け入るとかなり深い森が広がっています。フィールドのポイントには、子どもたちと色々な名前をつけています。一番南側の地点に橋があるんですが、上流の橋までがおおよそ私たちのメインフィールドで、橋から橋までは直線距離で1.5kmぐらいです。ただし、実際子どもたちは、川沿いの斜面を縦横無尽に登ったり降りたり、登ったり降りたりしますので、実はかなりの距離を移動しているという毎日を送ります。だいたい3~4歳児で1万2000歩歩きます。文科省の調査によりますと、このぐらいの運動量は、昭和55年頃の幼児の運動量と同じで、現代の既存の幼稚園に行っている子どもたちの、だいたい3倍ぐらいの歩数という調査結果がでております。改めて、見ていただくとお分かりいただけると思いますが、住宅地の道から一歩入るといきなり森が広がっているというのが、私たちのフィールドの特徴です。街のど真ん中にあるんですけども、手つかずの自然ということです。イノシシも出てきましたし、ヘビなどは日常的にいます。うまくいけばアナグマや野ウサギにも会

えるということで、街の生活をしていながら、かなり本格的な自然体験を毎日できるというような環境が整っています。私たちの森のようちえんでは、「雨でも冬でも毎日森へ」というコンセプト、それから「すべての子ども達にセンスオブワンダーを」と感性教育を大事にしています。現在は、平日の毎日来る幼児クラス、月1~2回の週末小学生クラス、同じく月1~2回の親子クラス、6年前からは発達に凸凹がある子どもたちを預かる療育のインクルーシブクラスもありまして、年間250日、延べ大体4000人、15年間で5万人の子どもたち、親御さんがこの森に通ってきています。

私たちの園には3つのしかけがありまして、その一つが「園舎がない」ということです。森のようちえんは全国に今200~250ぐらいあると言われていますが、なかなか園舎がないというところでやっているところは少ないです。園舎がないので、雨でも冬でもいつでも外に出るといふ、必然的にそういったシチュエーションになります。子ども達は、毎朝事務所に集合して、そこから装備を整えて出かけていくので、毎日上から下までアウトドア製品を身に付けている感じの格好です。公園と違って、台風みたいな強風が吹いた後は木が倒れているとか、そんなこともあります。川沿いを歩いて行っても、昨日なかった木がいきなり倒れていたりして、乗り越えなければ通行できない、ということがちょくちょく起こります。スタッフはもちろん事前に安全確認もするんですが、人間の想定もはるかに超えるような自然の変化というものもあります。雨が降っても基本的には園舎がないので、雨具を着て同じような活動が展開されます。この写真は、7~8年前に台風で倒れた際、小学生の子たちが枝打ちをしてくれて、こんな風に毎日来る幼児クラスの子どもたちが遊び場になっているという風景です。雨上がりには大きな水たまりもできますので、どろんこ遊びが始まります。フィールドは住宅地に隣接しているんですが、あえて水や電気は引いてい

ません。そのため、雨は子どもたちにとっては、本当に天からの恵み。大事な水ということで、喜んで水遊びや泥遊びをします。あまりに楽しくて気持ちよくて仕方ないというほど遊びこみます。

しかけの2つ目は「二十四節気を軸に活動している」ということです。12月期のカレンダーではなくて、子どもたちにこの二十四節気という暦を話して、様々な自然の表情や人と自然との関わりを紹介します。例えば「穀雨」の時はたけのこ掘りに行こうとか、あの鳥が来たらそろそろ秋の準備しなきゃねとか、そんなことをですね、日々話しながら、季節のめぐりを意識するような機会を作っていきます。季節はかなりめくるめく変化していきますので、これを追っていくと、かなり色々な変化が自然の中で起きているのだなと気がつくきっかけにもなります。そうなると、今のうちに急いでタケノコを取らないといけないとなり、毎日毎日活動はタケノコ掘りです(笑)。給食も一切子どもたちに媚びずに、季節のものを出し続けるものだから、味付けこそ変わるものの、本当に1週間、2週間タケノコが続いたりします。取り損なうと当然大きくなって、これがどんどん伸びて、今度は竹林が大変な荒れようになる。だから大きくなる前に食べたり、折ったり(間引きや間伐)しながら、子ども達自身でフィールドを整えていきます。タケノコを過ぎると、今度はヨモギが出てくる。ヨモギを取らないと今度は、団子が作れない。初夏にはこの団子を作って頬張るのが季語に。1年1年季節がちゃんと巡ってくることを意識させるために取り入れています。田植えもしますし、梅干しを作ったりもします。シソでジュースを作るというような、いわゆる昔のおばあちゃんたちが当たり前に行っていたような、畑仕事と季節の手仕事、そういったものも活動の中に取り込みます。食育の一環としても、できるだけ、自分たちでおやつですとか常備食をなるべく作るように心がけています。意識的に私たちが取り入れている

というよりは、そのものが子どもたちにとって、魅力であり、喜びであり、学びの教材になりえるんですね。地域の伝統のおやつなんかも作ります。しかし、森ですから、衛生的なキッチンとか近代的なガス器具がありません。すべて、古くからの羽釜とか、焚き火を使って調理するということになります。竹の葉っぱで包んで、灰汁で煮る「灰汁巻き」という地域の伝統菓子があり、これも人気のおやつですが、灰汁巻きは食べる時に、竹の葉っぱを割いて糸にして包丁代わりにして切り分けるんです。そういう暮らしの知恵みたいなことも、地元の方に習ったりします。冬は、だんぜん椎茸です。菌打ちや榎木の整備。これらも更新しないと、秋に食べるものがなくなるということで、毎年恒例の季節仕事です。なぜこの二十四節気こだわるかということなんです。実は二十四節気というのはご存知の方もいるかもしれませんが、各節に3つの歌が付いています。七十二候という歌がありまして、この「小雪」という11月ぐらいに巡ってくる節目にも、歌が3つ付いています。そのうちの 하나가、この「虹蔵不見（にじかくれてみえず）」という歌なんですけれども、子どもたちとは、「季節はそろそろぼちぼち小雪だね」という話をしている中で、ある日の夕方、虹が出た。普通だったら「綺麗だね」と喜ぶかもしれないんですけども。実際、この年、11月に虹が出たんですが、二重三重に広がって、ものすごくダイナミックで立派な虹が長く続きました。この七十二候を知っていると、この虹の様子が「あれ？」と。「この時期こんな風に虹が出るんだっけ？」というふうに、違和感に気づく。つまり、二十四節気や七十二候季節という、本来の季節の流れや表情をものさしにすることで、実際に目の前で起きている環境変化への気づきや異常な状況を判断する指標にできるということなんです。感性とは漠然としています。私達は、こういう微細なことへの気づきから磨かれていくものだと考えています。

さて、しかけの3つ目は、子ども達と約束している「森のルール」です。おもなルールは3つあり、まず、自分の命は自分で守るということ。そして、自分で考えて自分で決めること、また、困った時はまずは2人組のバディに相談し、それでもダメな時は、上のお兄ちゃんお姉ちゃん。さらにあの解決しないときだけ大人に声をかけてねということです。寒くなったら、森の中で暖を取るために、当然火を焚かないと過ごせません。ということで、幼児組の年長中心に、焚き火のスキルも学んで身につけてもらいます。しかし、これは私たちが指示したことではなくて、当初寒いから火をつけたいという、子どもたちの主体的な要求から始まりました。そしていつのまにか、代々子どもたちが年長の子の仕事として引き継いでいまして、年長になったら、秋から薪を自分たち拾い始めて、一から練習をしていって、いよいよ始まる真冬の本番に向かって、スキルを身につけていきます。この写真は、2年前の年長（当時6歳）が火付けの練習をしているシーンなんですけれども、この子は20分ぐらいかけて、このメタルマッチという道具を使って火をつけることができました。ただ全員がそんなに器用とは限らなくて、中には当然不器用ちゃんもいます。ただそれも年長になったらやるんだと、年長だからこそこできるはずだというような、先輩たちを見ながら育っていますので、みんな一生懸命頑張ります。メタルマッチは、金属同士の摩擦でマグネシウムの棒をこすり、生じた火花をたき火に育てていくんですが、気付けばこのメタルマッチを、6歳に満たない子が、1時間ぐらいかけて4000回擦り続ける、みたいなことにチャレンジしたりするんですね。でも手は震えて、豆はできて、それでも続けていく。時折仲間がやってきて、様子を見に来たりも。でもそこで仲間たちもまたいい距離感で、変なお世話を焼かない。「たっくん、どうしたら上手くできるか分かる？【あ・き・ら・め・な・い】ってことだよ」とだけ言って去っていくみたいな、そういう子

どもたち同士の静かな声援や、阿吽の呼吸で、みんなが心折れずに支え合い励ましあって、最終的には本当に火をつけられるようになって卒園していきます。人工的な遊び道具も一切フィールドには用意していません。街の中の谷底にあるので、実は不法投棄も多いエリアなんです。子どもたちはそういったものを拾い集めて、非常に憤慨し、ただ怒ってもしょうがないということで、投げ込まれたタイヤとか荷造りの網なんかを使って、小学生を中心に自分たちで遊び道具を作っていきます。この写真は、ある夏休みの風景ですけれども、この網がハンモックにならないかという発想を持ったようで、一生懸命ロープで結びつけて制作しているところです。私たちもすぐには手を貸さずに、自分たちのやりたいようにやってもらいます。そうすると結局2週間、3週間、1ヶ月、やっぱりかかるんですね。ようやく「できた！」と思って乗ってみたら、ドスンと下に(笑)。どうしたらロープを強く頑丈に結びつけられるかとか、角度はどうすればいいんだろうということ、コツコツと試行錯誤を重ねます。途中で諦めたり離れたりしつつもまた戻ってきて、大人を頼らず、自分たちで最後まで作り上げるんだと、子ども達だけで一生懸命やります。結局1ヶ月かけて無事に完成させました。8月31日。もう夏休み最終日で、結局この子たちが遊ぶ時間は全くなかったんですが、大満足をして、新学期の学校に戻って行きました。今でもこのハンモックは残っていて、毎日森に帰ってくる幼児の子どもたちが、ここでのびのびと転がったりお弁当食べたりしています。

水もないので、川にバケツを放り込んで水を汲み上げたりもします。これも汲み上げてごらんということではなくて、本当に水がなくて植物が枯れていたり、おたまじゃくしが干上がりそうになったりする状況を見て、子どもたちが発想したことです。バケツに結ぶロープも甘ければ、バケツが流れていってしまったり、落ちたバケツを今度は拾わなければいけないという

ことで、4~5m下のバケツを次は竹の棒でどう拾うか。水を汲むだけでも1日やっていますが、そういったことが子ども達はとても楽しいわけです。バディとは2人組のことで、お互いに助け合ったりする相手ですが、2人ではどうしようもない時は、お隣のバディに協力を求めたり、夏休み等は中高生もいるので、大きな縦割りの多様な子どもたち同士のバディも生まれます。自分達で火も扱え、ご飯が炊けて、ノコギリもうまく使いこなすので、ブルーシートとロープさえ与えれば、もう立派に仲間とビバーク(野宿)もできる！ということで、1年に2回、幼児~小中学生が森の中でブルーシート一枚でテントをつくり、一晩過ごすプログラムも実施しています。森での活動は、子ども達にとってドキドキ・ワクワクの連続で、自分で考え、行動するためにも、感覚をフル稼働させます。「森自体は整備された公園とは違って、天候の変化や危険生物との遭遇、突然の倒木とか、常に大人が全員を守れるとは限らないよ」ということを伝えて、「自分の命は自分で守る」という緊張感を持たせます。そんな中で育っていくと、幼児でも頬で風を感じて、「この後ちょっと雨が降るよ」なんてことを普通に言える子どもたちが出てきます。それはそうなんですよね。毎日外気に触れ、色々な体験をしているので、動物的に当たり前な感覚が研ぎ澄まされているということなんです。「五感が育つ」ということです。また、自分で考えて自分で決めるという自己決定の連続は、言い換えると、結果は自分に跳ね返ってくるということなんです。自分が主体であるという意識の醸成です。朝登園してくると、今日の気温は？天気はどうか？と空を見る、子どもによってはニュースを見てくる子もいます。何をやる？今日は何が必要？どこに行く？ということも自分たちで決めてもらいます。子どもたちにとっては、例えばお腹がすくというような感覚や、トイレに行きたいという感覚も、個々にタイミングも強さも違います。そういった体験も大事にしたいということ

で、自分がどう感じるかということ、それでどうするかということも、常に子どもたちに答えを出すようにさせています。特に雨具は、空を見て持っていくか、やめるか、持っていけば重いし、ないと困るし。そんな悩みが常にあるわけです。このチョイスというのは、当然幼児にとっては、未知のこともたくさんあります。だから失敗も実は多いんです。ただこの「トライ&エラー」や、PDCA サイクルの連続が、非常に豊かな経験値をもたらしていくと思っています。では、そんな毎日で結局何が育まれているのかということですが、「課題解決の基礎的な力」だったり、自分の輪郭や自分らしさの発見、なんですね。自分でやるとまず決めると。失敗することもあるけども、その後にはまたできる、できたということで自信がついて、そんな自分に達成感を覚えて「私大丈夫、私できる」そんな自己肯定感も生まれます。そうしているうちに、得手不得手、嗜好、やり方、傾向、くせ諸々、その子らしさが出現してくるんです。それは自分だけではなくて、周囲の友達もそういった輪郭が芽生えてきて、「色々な子がいるね、あの子はこうだね、僕はこうだね」と、そんな風に子どもたちが互いを認め合い、育ち合っています。この間の台風明けですが、フィールドが大荒れで、唯一避難場所にしてた大きなテントが崩壊しました。次の日子どもたちは台風一過の中、森にいつものように出てきて、「僕たちが新しいテントを作り直す」ということで、組み立てが始まりました。たかが4~5歳児、5~6人の子どもたちです。でもその中にはリーダーシップを取る子、マニュアルを読める子。力持ちの子、周りに目が配れる子、色々いるわけです。そんな集合知として、みんなの力を合わせて、最終的には子どもたちの力だけで、結局テントを張り上げることができます。こんなことを毎日毎日やっているというのが、私たちのようちえんです。そんな教育活動を、なぜ「森」でやっているかということですが、森というのは結局不自由で不便ということな

んです。椅子も時々壊れてしまいます、誰も直してくれないから、自分たちでどうにか直さないといけない。ウサギを取りたいんだけど、道具がない。弓矢を作ってウサギを取りに行く。ウサギ狩りは10年来チャレンジしていますが、まだウサギは一匹も取れていません(笑)。でもこの意志を継いで、今の子どもたちも弓矢づくりを盛んに行っています。

幼児でも毎日経験をつんでいくので、「雨上がりには、いつも泥んこになるから着替えを持っていこう」と見通しももてるようになってきます。りくくん(仮称)は、何でもきっちりできる子で、準備万端で泥んこの森へきて、泥遊びも大満喫して、持ってきた着替えで気持ちよく帰る見通しをもっていたんですけど、帰り際、靴だけ替えを持ってきていないことに気がついて、綺麗に履き替えた靴下を泥んこの靴の中に入れてたくないということで、30分ぐらい大泣きして悩みました。その後、リュックの中にあつたビニール袋を見つけて、靴下の上からそれでカバーして長靴を履くということをお願いしたんです。何しろそのアイデアは、彼にとっては大発明。お母さんが迎えに来なきゃ帰れないとか、スタッフに抱っこしてほしいということを相当訴えたんですけども、最終的には自分で解決できたということで自信を持って帰りました。その様子を1個下のぜん君(仮称)がじっと30分、観察していました。りく君がいよいよ長靴に足を入れる時に、「手伝うよ」とバディらしい姿を見せるんですけども、彼が30分寄り添っていただけかということそうではなかったことが翌日わかりました。次の日、ぜん君の荷物を見たら、リュックの中にたくさんスーパーのビニール袋が入っていたんですね。りく君の様子を見て、自分も何かあったとき使えるように、という彼なりの学びとアクションだったわけです。

何しろ自然の中なので、予期しないことがたくさん起こるということです。木の上の実をおやつにしようということになるんだけど、なか

なか届かないとか、ご飯を作りたいんだけど道具がないとか、そんなことは不自由で不便な森だからこそ、常に起きるわけです。その度に子どもたちは状況判断するとか、対応力、またやってみようという能力を発揮するということです。森にこだわる、何よりも大きい理由は、「一人で過ごせない」ということです。三ヶ田先生のお話にもありましたけれども、森は、慣れた大人の私ですら、時々暗い空になったり、ひやっと冷たい風が吹いたりするとちょっとドキッとするものです。そう考えると子どもたちにとって、どれほど不安な環境かということなのです。その中でやっぱり誰かと一緒にいることの安心、誰かに手伝ってもらうことで感じる思いやりや愛情、有難さ、そういったものをより深く味わい、実感でき、互いの理解にも結びつくということなのです。そればかりか、今日よく言われています「非認知能力」は当然育ってくるわけです。目標に向かって頑張るとか、感情コントロールする力などと言われていますが、不自由で不便で手つかずの森だからこそ、こういった力が引き出せ、育めるということかと思えます。ただし、では森の中に連れていくだけでよいか、というと、そういったことではないと考えています。無意図にみせる意図や、細やかな仕掛け、何より小、大人の役割というのは非常に重要で、関わりや声かけも非常にポイントかと思えます。参考までに、私たちのスタッフマニュアルを紹介させていただくと、冒頭「答えを教えない」がでできます。子どもたちが考えているところへ、指示出しや答えを提示することはしない。また、論さないことも重要。結果はどうであれ、その子の結果として受け止めさせるということなのです。説教する必要もありません。大人の解に向かって導くということはナンセンスです。子どもが思うままに進んで、その先の結果を子どもたちと一緒に受け止めるということ。急かさない。つい結果を求めがちなんですけど、それをやると自由な発想ですとか、主体性というのは削がれます。こういったこと

を意識しながら「見守る」ということが大事ではないかと思えます。自ら学ぶということや意識を行動に起こすということ子ども自ら発見させる、ということなのです。

自分たちの森が、自分たちが歩くことで崖が崩れたり、傷んでいけば、自分たちから森を守ろうという保全活動や啓発にもつながります。気づきを少し深めてやれば、他のフィールドでも色々荒廃が進んでいるということにも目が行き、すすんで自分たちの森以外も守ったり、環境にも関心を抱いたりするようになります。いま、新たなフィールドをもう一つ作ろうとしているのですが、そういうマインドが育っていますので、植樹などはもちろんのこと、自分たちで水道をしくななんて重労働も熱心にやってくれます。私たちの森のようちえんは、自然体験と結びつけながら環境教育の分野もミッションとして取り組んでいますので、当然 SDGs についても目標を定めて活動を推進しています。子どもが変わると、当然お母さん、お父さんたちが変わります。実際に子どもたちの家庭では、生活習慣も変わってきました。そのことが最終的には、社会の選択や全体の行動変容に結びつくのではないかと考えています。その一番の近道が子どもたちへのアプローチでもあり、次世代育成でもあります。彼らも、決してやらされるのではなく、自分たちが主体で色々な豊かな自然体験をする。失敗や成功など、自分で選んで決めた選択の結果を受け入れ、解を発見していく。仲間とつながることで更に叡智を磨く。そんな経験が、将来の、社会問題や環境問題に対する解題意識の芽となり、最終的には解決行動につながるのではないかと思います。今日はさすがに私もこちらに参っておりますので森はお休みですが、また来週からこんな笑顔が森に戻ってまいります。子どもたちには、色々教えてもらうことのほうが本当に多いです。ぜひ機会ありましたら、皆さまもいつか森へお越しいただき、子どもたちと歩いていただきたいです。ご清聴ありがとうございました。

話題提供 2

(藤浦) こんにちは。いま三ヶ田先生と市川さんのお話を聞きながら、自分自身がすごくワクワクして、気持ちの高ぶりがとまりません。鹿児島だけでなく日本各地、世界各地でこういう活動されている方がいらっしゃるんだなと思うと、なにか未来も捨てたもんじゃないなという気がしています。

私は、先ほどありました「森のようちえん」から着想を得まして、もう少し上の小・中学生を対象にした森の学校というのを作りました。英語では alternative school (オルタナティブスクール) といいます。いわゆるフリースクール的一种です。alt-というのは、他のものとか、代替りのもの、独自のものという風な意味があります。昔、『窓ぎわのトットちゃん』という本がベストセラーになったんですが、そこに出てくる巴学園のような学校がオルタナティブスクールになります。楠学園をつくった訳は、公教育というのはたくさんの人たちが練り上げられてきたもので体系的な学びとして非常に素晴らしいのですが、いま社会が非常に多様化、複雑化している中で、なかなか個別に対応しきれない、大きな組織では柔軟な対応が難しいという背景があります。子どもたちも、そして大人の私たちも、未知の課題にぶつかることが非常に多くなってきました。最近ではコロナですね。コロナでは生活様式から何からガラッと変わったので、初めてのことばかりで、一体どうしたらいいのかという答えは誰も思っていない。その中で自分はどうするのかというのを決めていく、そういう場面がこれから本当にどんどんどんどん増えていくと思います。

私たちのところでは3つ大切にしていることがあります。1つは『経験を重ねて感性を磨く』。物事って知識ももちろん大事なんですけども、いま何が起きているかというのを感じ取る力もすごく大事。物事を感じ取る感性を私たちのところではいちばん大事にしています。2

つめに『自分で考え、そして失敗する機会がある』。どんどんどんどん失敗してほしい。それができる場所だということ。3つ目が『自分以外の人と自然から学ぶ』ことです。この3点を意識した活動を通して、全体の中で大事なポイントは何だろうと要点を見抜く力、感性を磨くことをめざしています。

日々のすごし方ですが、時間割はざっくりと2時間おき、朝は学習、その後に講師の授業、午後は基本的に自主活動。その間にお昼ご飯があり、長期的な企画も入ってきます。(図解) 感覚としてはこういう感じです。大人は支援ときっかけづくり、環境づくりに徹して機を待ちます。子どもたちが「何かないかな」と思ってテクテクテク歩いていたら、「あれ、なんだか面白そうな本があるぞ」と。その子が興味を持ちそうな本とか、画集、ボードゲーム、カードゲームとかそういったものを、近くにさりげなく置いておく。物語だったりパズルだったり内容は様々です。百人一首の漫画を揃えて、もし興味を持ったらかるたをする。興味を持ってもらえなくて空振りに終わることも多いですが。馬が好きという子がいたら、馬の牧場に行って、乗るだけではなくお世話をさせてもらったり、音楽に興味を持った子がいたら、地元のシンガーソングライターさんに来ていただいて、ギターの弾き方と歌の作り方を教えてもらったりします。「秘密基地を作りたい」というのは年代に関わらずたくさんの子たちが言うんですけども、そういう希望があったら材料と場所を提供する。時々少しだけ力を貸します。

交流面では、地域の高齢者の方に昔ながらの知恵を教えていただくとか、今はコロナ以降少なくなっているんですけども、海外のボランティアさんと一緒にすごす形を10年以上やってきました。他には小学生が小さい子たちに本を読んであげたり、旅の音楽家さんがやってきて演奏を楽しんだりします。多様な年代や背景の人とふれ合うことで、「世の中にはいろいろな生き方があるんだな」とか「いろいろな考え方

の人がいるんだな」ということを知ることができます。特に海外の方が来られると、自分とは全く違う思考や生活習慣を持っているので、驚くこともたくさんあるんですね。けれど単に行きずりの人ではなく、1ヶ月とか2ヶ月、3ヶ月と生活を共にして、ずっと一緒に行動しているので、子どもたちも「この人は悪い人じゃない」というのがもう分かっている。そうすると「どうしてこういうことをするんだろう」とか、「どうしてほしいというのをどうやって伝えるか」という風な思考になります。違いは違いであって悪いことではなく却って面白いと、そういう風に考えるように促します。

次に「窓ぎわのトットちゃん」の中にも「畑のことは畑の先生に聞いたらいよいよ」というセリフがありましたが、海のことは海の先生、山のことは山の先生に聞いて、子どもたちは成長しています。この(スライド)左側の男性は釣り名人なんです。本当に釣りが大好きで、子どもたちをしょっちゅう釣りに連れて行ってくださっていたんですが、釣りという遊びをしながら、天気のことを教えてくれます。「雲が出てきたね。風が出てきたね。これからこういう天気になるよ」と。そういう話を聞いた後、子どもたちは学校に戻ってきて、天気図を見て「なるほどそういうことだったんだ」と思う。本当に魚を釣りたいと思ったら、魚の生態とか海の中の様子を知らないといけないからどんどん学んで吸収する。そういうふうには楽しみから実践し、そのまま学びへというふうには、自分のものに繋げていく学習を目指しています。日常生活はこのような感じです。

こちらは長期のプロジェクトです。楠学園が始まって15年目ですが、いろいろな事をやってきました。1つはこちら、教室を建てる「森の教室プロジェクト」です。ご覧のように、敷地の隣の杉林で木を切るところから始めて、足掛け3年くらいかけて自分たちの教室を作っています。木を切って樹皮を剥いで、3ヶ月くらい乾かしてから、それを森から運び出して刻ん

で…。ノミを使っているのは小学校2年生の女の子です。道具の使い方とかも教えてもらえながら、自分たちの教室を作っていくんです。長さを計算したり直角を出したり、危ない時にはどういうふうには安全を確保したらいいとか、大きな柱を持ち上げる時に子どもたちの力だけではとても足りないの、ロープをうまく使うとか、そういう工夫をしながらやっています。こちらは教室として実際に使っています。こちらは自転車旅の様子です。全員ではなくて希望者が行く形で、毎年2人から3人が参加します。この写真に写っているのは九州の地図ですね。こんなに大きな地図を見てじっくりルートを決めるので、始めは本当にアバウトなんです。「ああ適当だな」と思いながら、敢えて口出しせずに付いて行くと、「こっちの方が近いからね!」と、山越えのルートを選んだりするんです。そうしたら、くねくね細い道を上って行って、ずっとずっと上っていても、まだ着かない。やっとなある小さな村に行き着いて、「〇〇市に行きたいんですけど」と言ったら、「えっ、まだあと2、3倍あるよ」と。「戻って県道を回った方が早いよ」なんて地元の方に言われて、2時間ぐらいかけて登った道を15分くらいでバーンと降りて、県道をぐるっと回っていったら結局、そっちの方がずっと早かったという(笑)。そういう経験をすると、その日の夜から、もっと詳細な地図を広げて、真剣に地図を見るようになるんです。痛い失敗が身にしみる経験です。さらに身に染みた経験はこちらです。無人島サバイバル! 学園生はだいたい毎年キャンプに行ってるんですが、子どもたちの構成によって内容を変えています。例えば今年度は結構小さな子たちが多くて、キャンプに全く慣れていない子もいれば、かなり慣れている子もいるという状況で、そうになると2泊3日で割と安全なところに行って、自炊を中心としたキャンプをする。献立を考えたり、薪を拾ったり、できることは自分の力でやるという感じです。この無人島サバイバルの時は、一人の男の子がサバイバ

ルをしたいと言ってしまったがために、そして他の数人の男の子たちもやりたいと言ってしまったがために、本当に1週間無人島ですごすことになりました。私も一緒に行ったんですが、この敷き詰めてあるのは全部漂着物なんです。上のシートも漂着物です。小麦粉を少しは持って行ったんですが、毎日釣りをして、釣った魚とか、たまたま見つけたタコを捕って食べるという暮らしをしました。この写真に写っている子は「もう二度と行きたくない」と繰り返し言っていたのですが、やっぱり一番の思い出はこの無人島だったと、卒業式の時に語っていました。最初の体験があまりにも酷かったので、先輩たちからそれを聞いた子どもたちは、次のサバイバルはもっと快適な島に行きたいということで、小川のある島に行きました。真水が出るだけでかなり違いますね。1週間そういう生活をしてると、体つきから顔つきから変わってきて、人間の体というものなかなかすごいなという発見がありました。そういう状況の中でも子どもたちは普通に遊んだりくつろいだりするんですね。すごいと思います。

でもこういう野生的なことばかりではなく、もっと文化的なこと、例えばプロと一緒に音楽劇をしたりクラシックバレエや狂言を観に行ったりもします。これはどんな場所に行っても物怖じしない自分になってほしいという願いからです。災害に遭って目の前に何も無いという状況でも、なんとかなるさと薪を集めてほしいし、王室に招かれて宮殿の晩餐会に行っても、震えることなくゆったりと自分を保ってほしい。そのためにできるだけ幅広い体験をしてもらいたいと思っています。

創立10周年の企画では、ポーランドに行つて4週間ファームステイをしてきました。うちは森の中なので湿気がすごいんですよ。梅雨時期はとても快適ではないので、だったら雨が少なくなるところに行こうと。ホースセラピーをやっている牧場の大きなゲストハウスに泊まり、学習して、牧場のお手伝いをして、遊んで、お洗

濯をしてという日常の生活です。たまに遠足に行ったり、ポーランドのオルタナティブスクールの子たちと一緒に授業をしたり、2人ずつに分かれてホームステイをしたりというふうにすごしました。これも物見遊山ではなくある程度長い期間滞在することで、現地の生活の感覚を身を持って体験するというのが主な目的です。

なぜこんなにいろいろなことをするのか。こちら「試行錯誤」。好きな四字熟語なんですけども、試しに、やってみて、分からなくなって、そして挙句間違ふ。スポ根の漫画では、頑張つて頑張つて最後にやった一と成功するんですけども、「試行錯誤」だと最後はダメなんです。間違ふてしまう、失敗してしまふんです。でもその失敗は単に過程で、「うまくいかなかったな。じゃあ次どうしよう」というふうには、PDCAサイクル、先ほど市川さんの話の中にも出てきましたけども、コレがダメならアレは？という、まるでイタズラを失敗した時のように笑つて次へ進めるようになったらすごい面白いなど。そういうふうには、色々な体験をしていく中で、自分はどのような時にワクワクするのかとか、何が好きなのかということ、自分自身で感じて見つけていきます。そしてこういう自分だから将来はこんな風にして生きていきたいとか、こういう仕事を作っていきたいというふうには考えてほしいなと思っています。

体験から学んだことは、教えられたことではなくて自分で感じたことなので、納得し、知恵になる。そこから将来の道を早くから見定める子もいますし、まだまだ決められないという子もいます。それでもなんとなく、こういうことをやっていきたいから、楠学園は中学校までなので、高校はこういうところを目指していきたい、それなら今こういう勉強をしていた方がいいなということで、自ら勉強、学習を始めます。

(写真) 受験勉強をしている様子です。そういう未来の方から遡ってくる思考にだんだんなつていきます。そして中学校を卒業してその

まま高校に進学する子もいますし、農業をする子、海外に留学する子など、それぞれの道を歩んでいきます。

ところで、森の学校というふうに名付けているんですけども、なぜ森なのかというところです。まず、自然というのはまず自分の思い通りにいかない。野外活動をされているこちらの学会員の方は皆さんよく身に染みていらっしゃると思います。私は小学校の教員をしていた時代がほんの少しあるんですけど、家庭科や図工の教材を見てびっくりしました。セットになっていて、作り方も全部書いてあるし、切る線も全部引いてあるんですね。だからマニュアルに沿って一つ一つやっていけば完成するようになっているんです。そこには工夫の余地も失敗する余地もない。そういうふうに、失敗しないようにしないようにと懇切丁寧に育てられた子どもたちは、失敗はしたらダメだ、悪いことだと思ってしまう。失敗を恐れる子どもたちがすごく増えているのを実感として感じています。それに対して自然は、もう絶対に思い通りには行かないというのが基本ですよ。お天気もそうですし、遊具を作ろうとしても枝が折れてしまったり思うものが見つからなかったり。なので、じゃあどうしたらいいかなと観察して、考えて、そして工夫する余地が十二分にあります。次に、自然を見ていくと、特に虫とか花とかたくさん姿、形があって、生態があります。一つ一つ全部に意味があって、なんでこれはこういう形をしてるんだろう、なんでこの虫はここにいるんだろうと考える事が楽しい。そして、みんな違うからこそ支え合って、助け合って生きていると分かる。違うからいい、違うから関わられる、それぞれの存在意義があるというのを肌で感じて、自分も相手も世界も大切にできる人になってもらえたらいいなと思っています。そしてまた大事なのが自然への畏怖と信頼感です。私、実は鹿児島島の繁華街、天文館のど真ん中で生まれ育って、両方の祖父母宅も市内という環境だったんです。子どもの頃は暗闇がす

ごく怖かったんですが、こういう森の学校で活動し始めたら、夜の森は不思議と怖くなくて、なぜかなって考えた時に、つながりがあるかないかだと気付きました。ビルの中の暗闇からはお化けが出てくるかもしれないと思うんですけど、森の中だと月があって、星があって、野生動物がいて、あと小さな生き物たちもいて、たくさんつながりの中で、何か安心するんです。もちろん、みんないろいろな段階があるので、森が怖いって人もたくさんいると思うんですけども、そこを超えたところで、「自分も自然の中の一部なんだな」というのを感じることができれば、もう無条件の安心感、安堵感があるなと思っています。

最後に、私たち大人の役割として、『枠をかぶせない』ということをすごく大事にしています。スライドに、自然体験会との相違と書いたんですけども、森の学校をやっていますと言うと、初めの頃は「自然体験には、よく連れて行ってくるから」と言われることがありました。自然体験はもちろんすごく大事で大きな意義があるんですけども、でも目的が違うんですね。子どもたちって生まれた時は、本当に個性の塊でみんな違うものなのに、毎日の暮らしの中でだんだんと身近な大人の価値観に近くなっていく。こういう時はこうするものだとか、こういう時はこう考えるものだとか、いくつもの枠を自然に作り上げていくんです。一旦枠ができるとそれを壊すのは難しく、発想が当たり障りのないものになったり未知のものを怖がったりするようになります。だからこそ、そもそもの枠をかぶせない、子どもの動きや考えを邪魔しないというそこがすごく大事で、日常に体験を足し算するのではなく、むしろ日常から常識を引き算する、だから子どもたちが長い時間を過ごす学校という形をとってやっているという訳です。

大人側には忍耐力が問われます。市川さんのお話の中にすごく素敵な写真、泥んこの森で子どもが泥だらけになっているのがあったんで

すけども、これ自分が母親だったら悲鳴をあげかねません。洗濯どうするのど。そこを笑って、もしくはグッと堪えて「いい体験したね」と言えるかどうか。あとカリキュラムが自由だと、小学校2年生で掛け算九九ができないけど大丈夫なのかとか、小学校5年生でこんな漢字が書けないけど大丈夫なのかとか、それを大人がどこまで許容できるか。例えば「学習の面ではかなり凸凹があるけども、この子はこんな素晴らしい感性を持っていて、こんなすごい発想ができる。ものづくりも人づきあいも自分から進んで愉しんでいるし豊かな人生を送れそうだ」と躊躇なく言えるような、大人の器の大きさが求められます。

そして、それらは見えないものなので、見えないものがどれだけ大事かというのを伝えるのがいま直面している課題です。これは子どもたちにはあまり伝える必要はないと思っていて、むしろ社会に向けて伝えることはすごく大事なのにすごく難しい。なので私たちのような実践者と、皆さんのような有識者がつながって、「こういう事って大事だよ」と共通意識を持って、そしてこの後に話し合われる政策提言などにつなげていただくというのは、とても希望の持てることだなと思っています。

これが私たちの学校、森の学校楠学園です。子どもたちはこういうふうに日々を過ごしています。学校のウェブサイトや facebook などの SNS もありますが、実際の学校にも是非遊びにいらしてください。

ありがとうございます。

ディスカッション

(井倉) 基調講演の三ヶ田先生とそれから市川さん、藤浦さんの2人の話を聞いて、それぞれ別の場所で活動をされていますけれども、共通点や基本的な考え方というものの共通性を、皆様も感じられたかと思います。これからディスカッションの時間で、そのあたりを少し掘り下

げて、皆様と議論にできたらいいかなと思っております。よろしく願いいたします。今の3人のお話を少し振り返ってみたいと思います。その後に三ヶ田先生からコメントをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

まず基調講演の三ヶ田先生ですね。質疑の時間がちょっとなかったんですけども、すごくたくさんのお話しいただきまして、私も聞きながらすごくワクワクしたんですけども、子どもたちの現在の状況とか、それから課題、問題になっているトラウマですとか、依存症についての医療的というか、脳科学的、精神医学的な解説、それからアドベンチャー教育に取り組みされているということで、プロジェクトアドベンチャーの考え方だと思いますけども、フルバリューコンストラクトとかチャレンジバイチョイスとかそういったことを考えられながら実践されているということ、そして実際に実践されている被災者対象の活動ですとか、発達障がいや不登校の子ども、あるいはネット依存ゲーム依存の子どもへの活動ということで、大変多様な実践をされていて、まさに医療と野外教育のコラボレーションだなと思って、本当に今までにないような、すごくワクワクするようなそんな感じがしました。

次にそれを受けてのシンポジウムということで、市川さんと藤浦さんにお話をいただきました。実はお二人とも、私が大学でやっている「自然学校へ行こう」という授業がありまして、それにゲスト講師として、今のような実際の活動のお話をさせていただいているんですけども、私はお二人とも、鹿児島が誇る自然学校だなというふうにちょっと誇らしく思っています。市川さんの方は森のようちえんということで、4~5歳、小学生も含みますけれども、小さい子どもたちを対象に、本当に毎日、雨が降っても雪が降っても常に森へ行く。その中で日々季節を感じながら体験をして、その中で自分の命は自分で守るとか、常に自分たちで決めていくとか、そういったことを育てているすごい活

動だなどと思っています。うちの講義で話を聞いた学生たちが、今度インターンとか体験で森のようちえんに行くんですけども、そういう学生たちも驚くぐらいの、本当に生き生きとした、すごい子どもたちがそこで活動していると、そういう姿を目にすることができます。

藤浦さんの方も、実はすごく共通点が改めて思ったんですけども、試行錯誤することとか、やっぱりいろんな体験から感性を磨くこと、失敗をする機会を作ること、自然がすごく多様であるということに気づくこととか、とても大事なことを、実践活動を通じて伝えていくということを改めて感じることができました。

ちょっと私の感想になってしまうんですけども、私も自然の中で、自然体で生きるというのが、すごくやっぱり大事だなというふうに思っています。ずっと前から自然体験やキャンプをしていますけれども、最近特にちょっと自分の凝っているのが、焚き火を囲んで一夜を過ごすということで、昔からよくやるんですけども、改めてこれ大事だなと思って。実は一昨日とそれをしてきたんですけども、自然が多様であって、人間も自然の一部であるということや自然の体験の中から悟ったり、そこに思い至ったりということがすごく大事だなと思っていて、そういう自然の中で過ごす一夜、1日、何をするというプログラムでもなくて、ただ焚き火を見つめる、そのことだけでもすごい価値があるなと思って、今一生懸命私それを広げるような、そういう活動をしているところなんです。そのようなことを今3名の話聞きながら、私も改めて認識したところでした。

それでは三ヶ田先生、お二人の話聞いてコメントいただいてよろしいでしょうか。

(三ヶ田) ありがとうございます。2名の先生方も素敵な実践で、幼稚園と小学校と、少しこうテーマが変わってくるのかなとか思うんですけども、貫いているのが同じなのかな。幼稚園、保育園レベルのちっちゃいお子さんと、そ

の小学校のお子さん、小学生の場合には何か学ばなきゃいけないみたいな、世の中のそれこそかけ算ぐらいは覚えとかなないとみたいな、そういうこう must が出てくるのかな。そこはそこにまた大変なのかなと思うんですけど。すごく2つとも多い素晴らしい実践だなと思うんですよ。質問というか、ちょっと私聞いてみたいことがあって、先ほどその自然体験との違いという、自然体験会というんですかね。ただただ自然に行けば経験できる、体験できるということと違うものがやっぱりあるのかなと思ったんですね。そこには関わっていく大人が、先ほどおっしゃっていたみたいに、あの持っている援助のあり方とか、寄り添い方が多分違うのかなと思ったので、その辺を少し補足でまた聞いたら嬉しいなと思います。その寄り添う時のポイント、コツ、より強調して、単なる自然体験会とは違うんですというところがあれば、また少し教えていただきたいなと思います。

(藤浦) 先ほどスライドの中でも自然体験会とは違うというふうに申し上げたんですけども、やっぱり子どもと言いますか、人の価値観って日々の生活の中で形作られているので、特に子どもは周りの身近な大人がどういう意味づけをするかというのが、すごく大事になってくると思うんですね。本当に自然体験ということや言いますと、虫がいた時に近くの人が「うわ。嫌だ。虫だ。怖い。」と言ったら虫は怖いものだって思ってしまうし、「綺麗だね。見てごらん」と言ったら、「綺麗なんだな」と言って、観察しようという気になってくるし、そしてもちろん小、中学生、学校に行っていたら、毎日の日々の忙しい色々な出来事があるので、その中にあるたくさんの日々の色々なスケジュールをこなしていく中で、たまに自然界に行くと、どちらかというとりラックスするとか、そちらの方が中心になるような気がします。ごめんなさい。それは今ちょっとふと思ったことなんですけども。それに対して毎日森の中で過ごしている

と、本当にそれは自分のフィールドになるので、例えば先ほども小さい子たちもありましたけども、何か課題があった時に、それを自分でどうにかしようという意識が芽生えてきて、それを実は学校の方ではもっと広げて、例えば新聞を読んで世界的な課題に対して自分をじゃあどうするという風に立場を変えて考えてみるとか、そういうふうなことにつなげていくんです。意味付けとか、意識とかそういった面で、大きく変わってくるのではないかなと思います。

（井倉）はい、ありがとうございます。自然体験というとイベント的な感じですけども、自然が常にそこにあって、日常の中にある自然との付き合い、そんな感じかなというふうに私も感じました。三ヶ田先生、よろしいでしょうか。他にございますか。

（三ヶ田）いや、そうですね。その今の質問の意図の裏にあるのが、例えば最近放課後デイとかたくさんありますよね。預かっているだけみたいな、お預かりみたいなのところもあれば、いろんな体験をさせてあげますみたいなのところなど色々ありますが、果たして本当に子どもたちにとって良い体験になってるのかなって、なっていないのかなって。なんかその辺について色々考えることがあって、先生方の実践みたいはすごく面白いなと思って聞いていたんです。市川先生とか、特に子どもたちに主体性と言うんですかね。選択をさせることを促すみたいなのがあると思うんですけど、そういう体験と、大人が準備してさせていく体験とは違いがあるのかなと考えていて。答えにくいこともあるかもしれませんが、例えばその辺で意識していること、例えば作りすぎない良さというんですかね、準備しすぎない良さみたいなものとか、もし何かあったら教えてもらえたらなど。あまりにもお膳立てしすぎてしまうと、子どもたちが自分で考えることもなくなるのかな

と思って。あの先の発表の中にもたくさんはありましたが、プラスアルファもしあれば教えていただきたいなというふうに思います。

（市川）はい。森のようちえんでも放課後デイの子どもたち、児童発達支援の子どもたちをお預かりしているんですけども、6年前にこの事業を立ち上げた時に、当初は個別支援を中心に、凸凹をなだらかにしながら、いわゆる定型発達の森の子どもたちの活動に、準じた活動ができるということを目指すようなイメージで立ち上げたんです。ところが実際はそういうことではなくて、発達支援が必要な子どもたちから、定型発達の子供たちが学ぶことが多々あって、そのことからまたさらに化学反応が起きて、結果的には、その発達支援が必要な子が伸びていくということが、自然の中で起きてきたと。ここで結果的に邪魔していたことというのは、やはり大人の先入観であったりとか、人工的な教具だったりしたわけです。この実践の中から私たちの感じたことというのは、やはりおっしゃったように、「与えすぎない」ということなんですね。例えば普通の幼稚園であれば道具箱があって、みんな綺麗な色鉛筆とかクレヨンとかノリとかハサミとか、全部フルセット、1セットずつ渡すと思うんですけども、森のようちえんでは、例えばそこをもう一切やめてみました。人数分道具は用意しないとか、壊れてもそのまま置いておくとか。そうすると子どもたちは不自由で不便で困るんですけども、その中からクリエイティビティみたいなことが生まれるとか、いわゆる想像と創造ということが起きるんです。ただし、みんながそれを同じようにできるかという、そうではないと。できる子もいて、できない子もいるんです。ここにその多様であるということだったりとか、特性が活きているということであったりとか、あと上の子どもたちがいるという、この多様なロールモデルがあるということが、子どもたちにとってすごく大事ななというふうに感じました。な

ので当初考えていた個別支援ではなくて、もうたくさん色々な変な凸凹のある子どもたちの中に、何しろ溶け込ませちゃうと。その中でこそやっぱり磨き上げて、それぞれの個性が光り始めて、認め合って、それで自分らしさみたいなものを子どもたちも許容できるようになるという。その流れかなというふうに感じるんです。なので、私たちもやはり写真見たりお話すると、だいたいですね「焚き火できるんだ、ボーイスカウトみたいだね」というようなことだったりとか、まさに、スキルとか知識を学ばせてるような、一見そんな風にとられがちなんですけれども、全くそこには私たち注力してないというか。結局は焚き火なんかも、焚き火をできるようにすることを学んでいるんじゃないかと、物事を習得したりとか、理解したりするという、学びの方法を、プロセスを学んでいるという事なんです。現にそのようちえんで焚き火ができるようになって、みんなにカッコいいねと言われても、1年小学校に上がったなら何の役にも立たないし、全く評価されないわけです。じゃあその子どもたちが、自分たちは能力がないと思うかというのと違うんですよ。できないことをやり遂げた自分に自信を持って、今度自分がやりたいと思ったこと、例えばそれが教科教育であっても、九九であっても、自分でできるという自信がある子は、結局勉強になった時もそのエネルギーが湧いてくると。なぜなら学び方を知ってるから、体験してるからなんです。結局森で伝えたいこととか、体験させたいということは、そこなんですよ。それも申し上げた通り、多様な子どもたちがいるからこそ、自分やり方でも良さそうだとか、逆にあのやり方もいいかもねということで、他者を認めながら、自分も認めていくという、そういうことが森だと起きるのかなと。本当に子どもたちには、幼少期にぜひ森に行ってほしい、過ごしてほしいと思います。やっぱりいろんな子どもたちがいるという環境の中でこそ、こういった育みが達成できるのかなというふうに思っています。

(三ヶ田) ありがとうございます。そういう体験をする時は、もしかしたらリスクも伴うというか、先ほどもありましたけれども、危険と背中合わせの部分もあるのかなと思うんですけども、その辺への配慮とか、あるいはなんか今までこんなことを危険なことがありましたとか、こんな危ないこともありましたとか、保護者の方の中に、その辺が心配な方もいらっしゃるのかなと思うんですけど、そういう部分への説明の仕方とか、もしよかったら教えていただきたいです。

(市川) さっき地図でお見せしました通り、実際森に一步入るとかなり森なんですけれども、逆に一步出れば、かなり大きな街の中にありまして、万が一何かあった時には大きな病院とか、場合によっては森の中に救急車を呼び込む、呼び込めるようなルートも確保しています。そういったそのハード面をお母さんたちに見ただくと同時に、もちろんスズメバチも飛んでくるし、倒木もあるよということ、そのリスクを私たちだけが負うのではなく、お母さんたちもしっかり共有して、負ってほしいということで、お母さんたちの安心するまで一緒に森の中に同行してもらうようなことで理解を進めたりします。しかし一方で、子どもたちというのは非常にある意味で臆病で、いきなり黄色と黒のトゲがある、刺さるようなスズメバチをいきなり手で持とうみたいな子というのは、やっぱりいないんですね。その中で、それすら私たちが情報提供するんじゃないかと、上の子たちが「ブーンってこう羽音が聞こえたら、頭を押さえてしゃがむんだよ」とか「足がいっぱいある生き物はいきなり触っちゃダメ」とか、そういうことを子ども同士情報共有しながら、1個1個、実は安全管理教育を促していきます。今の子どもたちやっぱり体力的にも、そういう安全管理感覚も、当然昔の子どもに比べて落ちているというか、劣っている部分たくさんあります。だ

から一気にすべてのフィールドに放つという事はもちろんしません。子どもたちの育ちとか、そういった感覚を細やかに見ながら、「この子はここまで行ける」もしくは、「この子はここまでしか行けない」みたいなことも丁寧に教えていきます。木登り一つとっても、上の子たちがものすごい高いところまで行くんです。それ見ると当然、「僕もしたい、やる」と言うんだけど、これは自分で降りるところまでしか登らせないというルールのもと、一切大人たちは手を貸さないことにしています。そうでないと、実際自分の許容範囲を超えて、本当に自分の身を守れないところまで行ってしまって、非常に危ないんです。こういったその細やかな安全管理、リスクというのは、もしかしたら普通の幼稚園よりも、かなり危機感というか、緊張感を持ってスタッフも関わっていると思いますが、とにかく先に危ない事というのがどういうことか、例えば木登りであれば落ちたらどうする、落ちそうになったらどうするとことを子どもたちに見せて、万一に備えさせながら行くので、子どもたちはここから落ちたら自分が嫌だなとか、痛いだろうなというところには自分では行かないようになるんです。そんなことをしながら、少しずつスモールステップで課題を達成していったり、難しいものにチャレンジしていく。まさにその人工物ではないので、木の高さもその子どもたちのスキルとか体格にあったものがもう無用無数にあるわけです。だからそのスモールステップそのものも、自然の中だと提供しやすいということで、むしろ室内よりもある意味安全に子どもたちを体験させられるんじゃないかなというふうに感じているところです。

(三ヶ田) ありがとうございます。

(井倉) よろしいでしょうか。今のリスクマネジメントの話は、野外教育、野外活動に携わっている方すべてに共通する、大変関心の高い話

題かと思えますけれども、その辺については、森の学校の方はいかがですか。

(藤浦) はい、そうですね。やはり木登りの話を聞きながらそうだなと思って聞いていたんですが、センスオブワンダーが何より一番大事だと思うんですけども、センスオブフィアーもすごく大事だと思っていて、なんとなく怖いという感覚ですね。そしてそれは自分で感じたことを認めるというところです。例えば夏に暑い時に川に泳ぎに行くんですけども、プールと違って川というのは一定ではないので、毎日流れも変わりますし、川のあちら側とこちら側でも当然流れは違うので、自分はここまではいけるというのを、もう子どもたちは分かるんですね。特にずっと自然に親しんでいる子は、ここは遊ぶけどこっちは怖いから行かないとか、そういう感覚を育てることがすごく大事だと思っていて、あと日常生活の中で、例えば一緒に山歩きをしながら、「ちょっとこの木は腐りかけているからもし崩れた時にはこうしたらいいよね」というような、三点支持の考え方を時々伝えたりとかそういうことはしています。一つ気をつけているのは、飛び入りの子がいた時です。やはり普段から慣れている子はフィールドも良く知っているし、自分の力量も良く分かっているんですけども、あの同じ年代の子が遊びに来た時に、「あの子がやってるから自分もできるだろう」と思って、バーッと危険なところに行ってしまう。そこは大人が気をつけるようにしています。

会場とのディスカッション

(井倉) ここからは、会場の皆様からのご意見やご質問を受けながら進めていきたいと思えますけれどもよろしいでしょうか。では基調講演から含めて、2人のお話も含めて、ご質問から入っていただいても構いませんし、色々コメント、ご意見いただいても構いませんので。どなたからでも構いません。お願いします。

(徳田) 貴重なお話しありがとうございました。大阪体育大学の徳田と申します。藤浦さんのスライドで非常に印象的なキーワードがあって、『見えないものの価値を伝える』というところで、実践者と研究者とか、そういう有識者がコラボレーションにおいて、例えば政策提言とかいうところもお話していただきたいんですけども、とても大事で、やっぱり正しい価値を伝える、正しく評価してもらって、それをいかに伝えるかというところがここに書かれていることだと思うんですけども、藤浦さんの中で、例えば今までこういうような形で、例えば研究者とか有識者とコラボレーションして何か伝えたとか、なんかこういうふうには伝えられたらいいと思うんですけども、なんかそういったものがあれば非常に、ちょっと私も民間の方とコラボレーションして動くことが多いので、非常に参考になるなと思い、お聞きしてみたいなというところで質問させていただきました。

(藤浦) はい、ありがとうございます。そうです、それは本当に課題だと思っていて、つい先日も熊本のオルタナティブスクールの方たちと一緒に、ずっとそのことを語り合ってたんですけども、見えるものというのは伝えやすいけど見えない価値というのは伝えるのが難しいですね。ただ私楠学園をしながら、同時にまちおこしの活動もしているんですけども、色々なところとコラボしたり、ラボラトリーとして実験したり、新しいものを生み出したりするという意味で、『Lab 蒲生郷』というNPO活動を別にしておりまして、そこで色々な人とつながるということをテーマにしています。そこは主体としてまちおこしですが、同じようなことを楠学園でもしておりまして、例えばちょっと野外活動とは離れるんですけども、過疎地域の課題として、新聞配達が難しいという現実問題がありまして、それを子どもたちと話し合った時に、一

軒一軒配達してもらおうのではなくて、地域の共同の新聞受けを作ったらいいのではないかとこの話が出てきて、それを市役所の人、自分たちの過疎地域の地域の人、あと新聞受けを置く地域の方、あと地域の近くの家具メーカーですね、そういうところに色々話をしに行き、一緒にそういう場を作ろうというプロジェクトをしたりとか、それをまた色々な新聞に取材してもらってやっていこうとか、そういう一緒に活動というのをやる中で、こういう時にこういう考え方をしたという過程を、子どもたちとこういう話し合いをしたんですよというのを見せたりとか、こういう失敗をしたんですよというのをお話ししたりとか、具体例を挙げながら話すことで、何かしらそういう点数にならないものの過程とかを感じてもらえたらいいなと思って、できるだけ言語化するには努めています。

(徳田) はい、ありがとうございます。

(井倉) よろしいですか。はい、ありがとうございます。見えないものの価値を伝える、インタープリテーションのスキルのような、そんな感じがしました。

(井上) ありがとうございます。森林総合研究所から参りました、井上と申します。非常に鹿児島というか、九州の力の強さというか、先駆性というか、これが当たり前ではないかというふうに思ってしまうぐらいの、子どもたちが自ら体験すること、自ら考えてやっていくことというものの可能性と、それから今の生活の中から振り落とされてしまってるんじゃないかというような子どもたちへの支援を、お医者様と一緒にやっているとこれはすごく感銘を受けたところです。つまり森林という立場から、真逆の科学の知恵を伝えるような周りの研究者と一緒にやっている教育の立場として、すごく心強く思ったところなんですけれども、森林のフィ

ールドという観点から伺いたいんですが、井倉先生の演習林だったら何の問題もなく許可を得られると思うんですけども、藤浦さんと市川さんの活動の場所の使用許可とか、結構色々なことをされてると思うんですけども、水を飲むとか木を切るとか、そういうところの管理者との関係とか、東京だとそういう制約がものすごくあるので、森はあってもまず入れないとか、そういうことがすごく制約があるので、子どもたちの活動だけで人間性だけじゃなくて、制度制約がすごくあると思ったんですが、ちょっと簡単にその所有者とか、土地のつながりみたいなものを教えていただけるとありがたいです。

（井倉）ありがとうございます。極めて林学らしい感じがあります。大事な観点だなと思います。いかがでしょうか。土地の管理とか使い方ですね。

（藤浦）私のところは、校舎とか置いてある場所は、民間の方に土地を借りてそこに建てています。ただあの永久的に建てるのは色々制約が出てくるかなと思うので、撤去しようと思えば簡単に撤去できるような形の建物ですね。あと遊び場、冒険遊び場を設置しているんですけども、いわゆるプレーパークですね。その場所は市の保有林を、整備がてら使わせていただくという形を毎年契約で結んでおりましてやっています。裏側の森は個人の持ち物なので、先ほどの木を切らせてもらう時に、こういう活動をしたというふうに許可をいただきまして、その他の日常の活動は、正式に借りるということとはしていないけれども、子どもたちが走り回る分にはいいよというような許可の形ですね。でももちろん好意的な方ばかりではないので、そこらへんは色々兼ね合いを見ながら、できる場所をお願いするという形でやっております。

（市川）かごしま森のようちえんの場合は、全部民有地です。地権者が4人ほどおりまして、年間契約でお借りしています。もともと斜面でもう使い道がないような場所だったということが一つポイントだったかなと思うんですけども、税金をまかなえるぐらいの費用をこちらが捻出すれば、基本的には管理もしてもらえらるんでしょと。まして、子どものために使ってくれるんでしょとということで、比較的理解していただきながら使い始めています。ただし本来であれば、もっと田舎に行けば、鹿児島の場合にはもっと利用しやすい場所、安価な場所もたくさんあります。ただ私たちはその都市部に実はこだわって、都心部に住んでいる子どもたちへということでこだわっているんで、ある意味その東京とかと同じような状況下にあたりもします。現にですね希少な、貴重な場所ではあるんですけども、例えば公共事業の対象になって数年後に取り上げられる可能性があるとか、そういうリスクはもちろんありますし、地権者さんの意向でもう来年から貸さないよと言われた時点で、活動自体が滞ってしまうんですね。とはいえやはり行政がこれ使っていいよと言われるようなフィールドをチョイスとしてはあったんですが、やっぱりそちらは本当に制約がついてきてしまって、それだと結局私たちの目指したい活動ができないんですよ。なので根気強く民間の方を説得したり、時には子どもたちと訪ねて、森のものを拾ってお届けしたり、そういう本当に理解一つ一つを進めながら、隣の地権者さん、またその隣の地権者さん、ということで15年かけて、かなり広くフィールドをお借りすることに今なってます。申し上げた通り、私たちもかなり際どい、その失いかねない土地の中で活動しているので、今後やっぱり土地をどういうふうに保全とかですね、キープしていくかというのが、常に私たちの課題でもあります。

（井上）ありがとうございました。すごく可能

性を広げていただいた、森の可能性も広げていただいたようです。ありがとうございます。

(井倉) はい、ありがとうございます。ちょっと私の方から補足しておきますが、今かごしま森のようちえんが、実は鹿児島大学とコラボして、演習林のメインは大隅半島の方にあるんですが、大学の近くに1ヘクタールほどの小さな森を持っています。その森にかごしま森のようちえんがやってきて、今活動をし始めました。これのメリットは、大学のすぐ近くにあるということで、うちの学生がそこにボランティアに行くことが容易にできるということです。今まではちょっと遠いところに行かなきゃいけなかったのですが、近くになることによって、たくさんの学生がボランティアをして、それで学ぶことができるということです。市川さんには講義でも来てもらうんですけども、それを機にこんな活動に興味ある人はおいでということで、色々な学生が全学から、学部問わずに来てくれて、この活動に参加することによる大学教育と言いますか、そういう学びの活動が今起きています。これは大学としても、私の一存ではいきませんが、大学としても、ぜひこれからも発展させたいなと思っている活動です。

他にありますか。はい、お願いします。

(平野) お話ありがとうございました。信州大学の平野と申します。先ほどの見えないものの価値を伝えるとか、枠を被せないといったお話や、市川さんのところにあるスタッフマニュアル例をいくつか挙げていただいて、急かさないとか、そういういわゆる、指導方針というか哲学というか、そういうものが非常によくわかりました。そこで三ヶ田先生に質問させていただきたいんですが、先生の先ほどのあそぼうキャンプのところに、キャンプにおける様々な配慮というのはいくつか書いていただいていて、その中に「人という安心感を得る」という言葉が

ありましたが、これを具現化するためには、先生がキャンプの中でスタッフにどんな言葉かけをしているとか、あるいはどういうふう to これをするために何かやってらっしゃることがあれば、具体的なことを教えていただきたいと思って。これすごい大事なことだなというふうに思ったんですが、そこを教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

(三ヶ田) ありがとうございます。難しいところだなと思いながら今聞いてたんですけども、安心できると言うことはすごく難しいですよ。診察の中でもそうなんですけども、信頼関係というんですかね、トラウマを抱えているお子さんたちと信頼関係を築いていくというのは、何て言うんですかね、こう感覚をつかまなきゃいけない部分があるのかなと思います。明文化できないのかなというふうにも思うんですけど、でもそれをなんか明文化する努力はしないとイケないのかなと思うんですが、私が日頃こう感じてるのは、その押し付けないとか、相手のことをよく観察して嫌がることをしないとか、一緒にいるだけでも落ち着けるという感覚を、できる人とできない人とやっぱりいるのかなと思うんですよ。できる人がやってる姿を見て、「ああやればいいんだな」というのを見て学んだ人は、やっぱりできるようになるとか。伝承していくようなものでもあるのかなとか思ったりしています。例えば綺麗事でいくらでも人と一緒にいて、安心できるようにみたいな、あの安心感を与えられる支援をしましょうと言うけれども、実際には「分かりましたやってみます」と言って、一生懸命やりすぎて、心臓マッサージと同じで、やりすぎてしまって心臓に負荷がかかってしまったりということがありますよね。なので本当に難しいことだなと思いながら、観察する力と、本当に寄り添う力というのがすごく重要なのかなと思っています。このキャンプにはトラウマ治療を中心にやっていく団体で、EMDR学会だとか、あるい

はYMCA とかが入っている関係もあって、その辺の質が一緒の気がします。あそぼうキャンプの中では、そういうこう人という安心感ということを提供できるスタッフ陣がすごく充実してるなどというのは、私も感じているところです。答えになったかどうか分かりませんが、あの努力していきます。私もちょっとそのどうしたら良いのかなと考えてみます。

(坂本) お話ありがとうございました。筑波大学の坂本と言います。僕は発達障がい児のキャンプをずっとやってきました。20年ぐらいになりますかね。あの先生方の対象としている年齢よりもちょっと上の青年期の中期ぐらいまでの子どもたちの対象にしています。先ほど市川先生の話にありましたけれども、凸凹がこう滑らかになっていう話がありました。それから枠の問題もあったんですけど、いつも指導してて悩むのは、僕は基本的に先生方の考え方に賛成なんですけど、子どもたちが輝くということと個性化していくってということと、それからいずれは社会に出ていくじゃないですか、その社会化していくところの狭間で、すごく悩むんですね。そのあたりのこと、時間がないので手短にお考えを教えてください。

(井倉) すごく、今何か大事な話題を振られたような感じがして、ちょっともう30分延長していいですか。じゃあ時間もないので最後に一言ずつ、コメントいただこうかなと思っていましたので、ちょっと最後のコメントのつもりで、今の問いかけに対してお答えいただけたらと思いますがいかがでしょうか。皆さんですね。個性を伸ばすことと社会性ということですね。森のようちえんとかでは、小学校に行って苦勞するという話もいろいろありますから、その辺のことを終わりのコメント代わりに頂ければと思いますが、どなたから行きましょうか。三ヶ田先生からいいですか。

(三ヶ田) 手短に一言で言うとしたら、そういう部分を作ってあげたほうがいいのかもたないですね。そういう社会をですね。そういう子どもたちが輝ける社会を作るというか。そういう就労の場所とか、もっともっと増えていくといいのかなど。無理して合わせて、なんか入っていかなきやいけない社会にばかりならず、そういう子たちがいきいきといて、「自分は生きていいんだ」みたいな、そういう場所を作って行ってあげなきやいけないのかなというふうに思います。

(市川) やはり15年の中で私たちの考えもかなり変わってきて、今ではやっぱりその個性輝きをやっぱり貫いていくということで、後押しする方向に舵を切っています。そのためには、ようちえんに続く、小学校、中学校、しいてはやっぱり社会に対して変革というかを働きかけていくことになると思うんですけども、それは子どもたち自身が、今同じような道をたどりながら頑張っていますので、私たちもぜひその後ろを押していくという形でやっていきたいと感じています。

(藤浦) 「フリースクールって自由なんですよ」と言われます。「好きな好き勝手にしていいの」と言われることもあるんですけども、自分で決めて自分で行動するということは、それに大きな大きな責任が伴ってきますので、自分の思いを実現するためには、もちろん自分も大事だし、相手も大事だし、環境も大事だし、大事なことをちゃんと大事にしていくという、本当の社会の基本的なことを身につけていかないと、描いて自分のやりたいことも実現していかないと、思うので、そういう色々な人の思いと意思と大事にしていくというのは伝えるようにしています。

(井倉) ありがとうございます。今の質問を聞きながら私も思ったんですけども、やっぱり個

性的に生きることが社会の体制になるような、そんな時代を目指すしかないのかなというふうに思うんです。子どもじゃなくて私は普段大学生と接するんですけど、学生たちにいつも言ってるのは、「思いっきり浮こう」と言うんです。やっぱりみんなと同じになるんじゃなくて、思いっきり浮いて、ちょっと外れ者になるぐらいの、それが普通になるぐらいに生きようぜということを常に言うんですけど、やっぱりこういう自然体験とかをやって、野外教育とか、そういうことをやっけて、私が今最終的に一番の課題だなと思っているのは、一人一人が主体的に生きるということ。敷かれたレールの上を歩いて来ている人が大半の中で、いかに自分らしく主体的に生きるかということに、最終的にはこの野外教育、自然体験もたどり着くなどいうふうに、自分の中では感じていました。なので、そこが一番大事な課題かなと思って、この

社会全体が変わっていく、そういうことが最終的な答えなのかなと思っています。ありがとうございました。いい投げかけありがとうございました。

はい、ということで時間になりましたので終わりたいと思いますが、このシンポジウムのテーマは、「多様性の時代と持続可能な社会を見据えた野外教育のあり方を考える」ということで、ちょっと堅苦しいテーマでしたけれども、自然の多様性、人の多様性、そういったものをいかに受け入れながら、多様で生きやすい社会、世界を作っていくかという、そういうことにつながるかと思います。皆さんそれぞれの野外教育のあり方が、少しでも深められた時間であったら大変嬉しく思います。はい、それでは今日のご参加ありがとうございました。以上で終わりたいと思います。